

国
(問題)
語
2008年度

< H20021121 >

注 意 事 項

- 1 問題冊子は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は2～7ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべてマーク解答用紙の記入欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルでマークすること。
- 4 氏名をマーク解答用紙の所定欄（1か所）に記入すること。
- 5 マーク欄ははつきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムでていねいに、消し残しがないようよく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	● 良い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い

- 6 試験終了の指示がでたら、すぐに解答を止め、筆記具を置くこと。終了の指示に従わず解答を続けた場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文は明治期の作家二葉亭四迷の小説の一部である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

俗曲はわからない。が、わからなくても、わたしは大好きだ。新内でも、清元でも、上手の歌うのをきいていると、何だかこう国民の精粹せいさいとでもいうような物が、髭髯ひげとして粹な声や微妙な節回しの上にあられて、わが心の底に潜む何かに触れて、何かが想い出されて、何とも言えぬなつかしい心持ちになる。

お糸さんの顔は縁側からは見えないけれどきつと少しポツと上気して、薄目をあいて、恍惚こうごとして我か人かの境に迷いつつ、歌っているに違いない。いわゆる神来しんらいの興が中に動いて、歌に現うつをぬかしているのは歌う声に魂のはいっているのでわかる。恐らくもうそばでお糸さんや下女のきいていることも忘れていよう。お糸さんはもう人間のお糸さんでない。人間のお糸さんはどこへか行ってしまつて、からだに俗曲の精霊が宿っている、そうしてお糸さんの美音を透して直接に人間と交渉している。お糸さんは今俗曲の巫女いぢこである。薩満しゃまんである。平生のお糸さんは知らず、この瞬間のお糸さんはお糸さん以上である、いや、人間以上で神に近い人である。

こう思うと、時としてはこうして人間を離れて芸術の神境しんきょうに出入しうるお糸さんは尋常たふだの人間でないように思われる。お糸さんの人となりは知らないが、歌において三味線においてお糸さんは確かに一個の芸術家である、事によると、芸術家と自覚せぬ芸術家である。要するに、俗物でない。

わたしも不肖ながら芸術家の端くれと信ずる。お糸さんの人となりは知らないでも、芸術家の心はただ芸術家のみよくこれを知る。この下宿に客多しといえども、よくお糸さんを知る者はわたしのほかにあるまい。わたしの心を解しうる者も、お糸さんのほかにはないはずである……と思うと、まだろくに物を言った事もないお糸さんだけれど、何だかお糸さんが生まれぬ前からの友のように思われて、わたしは……ああ、わたしは……

わたしの下宿ではいつも朝飯が済んで下宿人が皆出払つたあとで、ゆっくり掃除や雑巾掛けをする事になっていた。お糸さんは奉公人でないから雑巾掛けには関係しなかつたが、掃除だけは手伝っていたので、いつもその時分になるとお掃除いたしましたよと言ってはわたしの部屋へ来る。わたしは内々それを心待ちにしている、来ると急いで部屋を出て縁側をうろつく。うろつきながら、見ぬ振りをして横目でチヨイチヨイ見ていると、お糸さんが赤い襷たすに白地の手ぬぐいを姉様かぶりというかいいいいでたちで、わたしの机や本箱へパタパタと払塵はらなを掛けている。それをこつちから見てみると、お糸さんが何だかこうわたしの何かのような気がして、うれしくなつて、こうしたところもわるくないなと思う。

ところが、お糸さんが三味線をひいたあくる朝の事であつた。万事が常よりも不手回りふてまわりで、掃除にもいつも来るお糸さんが来ないで、小女こひめが代わりに来たから、わたしは a、今日はお竹どんが病気で寝ているので、受け持ちなんぞの事を言っていられないのだという。それなら仕方がないようなものだけれど、小女のは掃除するのじゃなくて埃ほこりをほだてて行くのだから、わたしがしかり付けてやつたら、小女は何だかぶつぶつ言つて出て行つた。

しばらくして用をたしに行こうと思つて、ヒヨイとわたしが部屋を出ると、いつ来たのか、お糸さんがついそこで、着物の裾をクルツとまくつた下から、華美な長襦袢ながじゆばんだか腰巻だかを出しかけて、倒たふさになつてせつせつと雑巾掛けをしていた。わたしの足音に振り向いて、お邪魔さまと云つて、身を開いて通してくれて、お糸さんは何とも思つていぬようだったが、わたしは何だか気の毒らしくて、急いで二階を降りてしまつた。

用をたしてから出て来ると、手水鉢てみづばちに水がない。小女はいないかと思まわす向こうへお糸さんが、もう雑巾掛けも済んだのか、バケツをさげてやつて来たが、と見ると、すぐ気が付いて、

「 b ……「ただいますぐ持つてまいりますよ。」

と駆け出して行つて、台所から手桶をさげて来て、

「 c 」

と、ザツと水をあげる時、どこの部屋から仕掛けたベルだか、帳場で気短かにけたたましくチリリリンと鳴る。お糸さんが台所から面を出して、

「 d ……「だれもないのかい？ 十番さんでさつきからお呼びなされるじゃないか。」

とお糸さんがやっぱり下女並みの返事をして、

「お三どん新参で大まごつき……」

とわたしの面を見てにっこりしながら、ちよいとおどけた手付きをしたが、そのまま所体崩して駆け出して、表梯子をトントントンと上って行く。

わたしが手を洗って二階へ上って見たら、お糸さんはもう裾をおろしたり、襦をはずしたりして、ちゃんとした常の姿になって、突き当たりの部屋の前で膝を突いて、何か用をきいていた。

わたしは部屋へ帰って来て感服してしまった。お糸さんは歌がうまい、三味線もうまい、女ながらも立派なだ。それが今日はどうだろう？ お竹が病気なら仕方ないようなものの、まるで下女同様に追い使われている。下女同様に追い使われて、慣れぬ雑巾掛けまでさせられた上に、無理な小言を言われても、格別いやな面もせずに、何とか言ったっけ？ そうそう、お三どん新参で大まごつきといってにっこり……偉い！

(二葉亭四迷「平凡」より)

問一 傍線部1「神来の興」とあるが、その意味としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

ア 天賦の才 イ 全能感 ウ 靈感 エ 信仰の念 オ 陶酔

問二 傍線部2「わたしは……ああ、わたしは……」とあるが、そのあとに続く気持ちとしてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

ア お糸さんを深く理解していることを伝えたい イ ようやく芸術の友に出会えてうれしい
ウ 芸術こそ自分の生きる道なのだと思う エ お糸さんを好きになってしまったかもしれない
オ 芸術家としてお糸さんにはとてもかなわない

問三 空欄 a に入るもっとも適当なものを次のア～オから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

ア 怪しいと思って、どうしたのだといぶかしげにいうと
イ 不平に思って、どうしたのだとなじるようにいうと
ウ 腹を立てて、どうしたのだと怒りにまかせていうと
エ やけになって、どうしたのだと大声でいうと
オ 不審に思って、どうしたのだとやさしげにいうと

問四 傍線部3「急いで二階を降りてしまった」とあるが、主人公の気持ちとしてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

ア 下女同様の仕事をしているお糸さんを見るのがはばかりれる気持ち
イ 自分がいるとお糸さんの仕事の邪魔になるのではとおもう気持ち
ウ 雑巾がけは、ほんとうはお竹の仕事のはずなのにと腹立たしい気持ち
エ お糸さんにこんな仕事をさせているお糸さんに文句をいいたい気持ち
オ はやく気分転換をして、いろんなことを忘れない気持ち

問五 空欄 b c d には、それぞれどのような言葉が入るか。もっとも適当なものを次のア～カの組み合わせから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

ア	b	お待ちとおさま	c	おやそうだっけ	d	へい、ただいま
イ	b	お待ちとおさま	c	へい、ただいま	d	おやそうだっけ
ウ	b	おやそうだっけ	c	お待ちとおさま	d	へい、ただいま
エ	b	おやそうだっけ	c	へい、ただいま	d	お待ちとおさま
オ	b	へい、ただいま	c	お待ちとおさま	d	おやそうだっけ
カ	b	へい、ただいま	c	おやそうだっけ	d	お待ちとおさま

問六 空欄 e に入るもつとも適当な語句を次のア～オから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

ア 近代的社会人 イ 一個の芸術家 ウ 自立した芸人 エ 一人の人間 オ 一人前の粹人

問七 傍線部4「偉い！」とあるが、これはお糸さんのどういうところを誉めているのか。もつとも適当なものを次のア～オから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- ア つねにまず人のことを思いやる親切心 イ すぐれた資質をもちながら身を低くする謙虚さ
ウ つらい境遇にも不平を見せないけなげさ エ 自分の境遇を軽い冗談にする粋な心意気
オ 自分の気持ちを率直に相手に伝える聡明さ

(二) 次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

生命とは何か？ それは自己複製を行うシステムである。二十世紀の生命科学が到達したひとつの答えがこれだった。一九五三年、科学専門誌『ネイチャー』にわずか千語（一ページあまり）の論文が掲載された。そこには、DNAが、互いに逆方向に結びついた二本のリボンからなっているとモデルが提出されていた。生命の神秘は二重ラセンをとっている。多くの人々が、この天啓を目の当たりにしたと同時にその正当性を信じた理由は、構造のゆるぎない美しさにあった。 a さらに重要なことは、構造がその機能をも明示していたことだった。論文の若き共同執筆者ジェームズ・ワトソンとフランシス・クリックは最後にさりげなく述べていた。この対構造が I ことには私たちは気がついていないわけではない、と。

DNAの二重ラセンは、互いに他を写した対構造をしている。そして二重ラセンが解けるとちようどポジとネガの関係となる。ポジを元に新しいネガが作られ、元のネガから新しいポジが作られると、そこには二組の新しいDNA二重ラセンが誕生する。ポジあるいはネガとしてラセン状のフィルムに書き込まれている暗号、これがとりもなおさず遺伝子情報である。これが生命の“自己複製”システムであり、新たな生命が誕生するとき、あるいは細胞が分裂するとき、情報が伝達される仕組みの根幹をなしている。

分子生物学的な生命観に立つと、生命体とはミクロなパーツからなる精巧なプラモデル、 b 分子機械に過ぎないといえる。デカルトが考えた機械的生命観の究極的な姿である。生命体が分子機械 c、それを巧みに操作することによって生命体を作り変え、改良 d することも可能だろう。たとえすぐにそこまでの応用に到達できなくとも、たとえば分子機械の部品をひとつだけ働かないようにして、そのとき生命体にもどのような異常が起きるかを観察すれば、部品の役割をいい当てることができるだろう。つまり生命の仕組みを分子のレベルで解析することができるはずである。このような考え方に立って、遺伝子改変動物が作成されることになった。 g ノックアウト² マウスである。

私は膵臓^{すいぞう}のある部品に興味を持っていた。膵臓は消化酵素を作ったり、インシュリンを分泌して血糖値をコントロールしたりする重要な臓器である。この部品はおそらくその存在場所や存在量から考えて、重要な細胞プロセスに関わっているに違いない。そこで、私は遺伝子操作技術をクシ¹して、この部品の情報だけをDNAから切り取って、この部品が欠損したマウスを作った。ひとつの部品情報が叩き壊^{たた}されているマウスである。このマウスを育ててどのような変化が起こっているのかを調べれば、部品の役割が判明する。マウスは消化酵素がうまく作れなくなると、栄養失調になるかもしれない。あるいはインシュリン分泌に異常が起こって糖尿病を発症するかもしれない。

長い時間とたくさんのお金を投入して、私たちはこのようなマウスの受精卵を作り出した。それを仮母の子宮に入れて子供が誕生するのを待った。母マウスは無事に出産した。赤ちゃんマウスはこのあと一体どのような変化を来すであろうか、私たちは固唾^{かたす}を飲んで観察を続けた。子マウスはすくすくと成長した。そしておとなのマウスになった。なにごともしこらなかつた。栄養失調にも糖尿病にもなっていない。血液が調べられ、顕微鏡写真がとられ、ありとあらゆるセ²イミツ検査が行われた。どこにもとりたてて異常も変化もない。私たちは困惑した。一体これはどういうことなのか。

実は、私たちと同じような期待をこめて全世界で、さまざまな部品のノックアウトマウス作成が試みられ、そして私

たちと同じような困惑あるいは落胆に見舞われるケースは少なくない。予測と違って特別な異常が起きなければ研究発表もできないし、論文も書けないので正確な研究事例は顕在化しにくい。が、その数はかなり多いのではないだろうか。私も最初は落胆した。もちろん **Ⅱ**、実は、ここに生命の本質があるのではないか、そのようにも考えてみられるようになってきたのである。

遺伝子ノックアウト技術によって、パーツを一種類、ピースをひとつ、完全に取り除いても、何らかの方法でその欠落が埋められ、バックアップが働き、全体が組みあがってみると何ら機能不全がない。生命というあり方には、パーツが張り合わされて作られるプラモデルのようなアナロジーでは説明不可能な重要な特性が存在している。ここには何か別のダイナミズムが存在している。私たちがこの世界を見て、そこに生物と無生物とを識別できるのは、そのダイナミズムをコントロールしているからではないだろうか。では、その動的なものとは一体なんだろうか。

私は一人のユダヤ人科学者を思い出す。彼は、DNA構造の発見を知ることなく、自ら命を絶ってこの世を去った。その名をルドルフ・シェーンハイマーという。彼は、生命が「動的な平衡状態」にあることを最初に示した科学者だった。私たちが食べた分子は、瞬く間に全身に散らばり、一時、緩くそこにとどまり、**Ⅲ** 身体から抜け出ていくことを証明した。つまり私たち生命体の身体はプラモデルのような静的なパーツから成り立っている分子機械ではなく、パーツ自体のダイナミックな流れの中に成り立っている。

(福岡伸一「生物と無生物のあいだ」より)

問八 傍線部1、3にあたる漢字がカタカナ部分に使われている語を、それぞれ次のア、イ、ウから一つずつ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ア | ク | 逐 | イ | ク | 心 | ウ | ク | 調 | エ | 語 | ク | オ | ク | 別 | | | | | |
| 2 | ア | セ | イ | 功 | イ | セ | イ | 惨 | ウ | セ | イ | 鋭 | エ | セ | イ | 求 | オ | セ | イ | 治 |
| 3 | ア | カ | ン | 迎 | イ | カ | ン | 病 | ウ | カ | ン | 接 | エ | カ | ン | 動 | オ | カ | ン | 修 |

問九 空欄 **a**、**c** に入るもつとも適当な語を、それぞれ次のア、イ、ウから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| a | ア | ア | もちろん | イ | も | つ | と | も | ウ | と | り | わ | け | エ | な | か | で | も | オ | し | か | し | | | | | | | | | | | | | | | | |
| b | ア | あ | る | い | は | イ | す | な | わ | ち | ウ | も | し | く | は | エ | い | わ | ゆる | オ | い | わ | ん | や | | | | | | | | | | | | | | |
| c | ア | を | 使 | え | る | な | ら | ば | イ | の | は | ず | な | ら | ば | ウ | で | な | い | な | ら | ば | エ | に | 似 | て | い | る | な | ら | ば | オ | で | あ | る | な | ら | ば |

問十 空欄 **I** に入るもつとも適当なものを次のア、イ、ウから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | 直 | ち | に | 自 | 己 | 複 | 製 | 機 | 構 | を | 示 | 唆 | す | る | イ | い | ず | れ | 生 | 命 | の | 神 | 秘 | を | 明 | ら | か | に | す | る | | |
| ウ | D | N | A | 二 | 重 | ラ | セ | ン | の | 根 | 本 | 機 | 能 | を | 担 | う | エ | 生 | 命 | の | 設 | 計 | 図 | と | し | て | の | 機 | 能 | を | 持 | つ |

問十一 傍線部A「私たちは固唾を呑んで観察を続けた」に込められた気持ちとして、もつとも適当なものを次のア、イ、ウから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | 生 | 命 | の | 神 | 秘 | が | 解 | 明 | さ | れ | る | の | で | は | な | い | か | と | 、 | わ | く | わ | く | し | な | が | ら | 見 | 守 | つ | て | い | る | 。 | | | | | | | | |
| イ | 長 | い | 時 | 間 | と | 多 | 額 | の | 研 | 究 | 資 | 金 | を | 投 | 入 | し | た | の | に | 、 | 実 | 験 | が | 失 | 敗 | し | たら | ど | う | し | よ | う | と | び | く | び | く | し | て | い | る | 。 |
| ウ | 赤 | ち | ゃ | ん | マ | ウ | ス | が | お | と | な | に | な | る | ま | で | 育 | つ | て | 、 | 実 | 験 | が | 成 | 功 | す | る | よ | う | に | 折 | つ | て | い | る | 。 | | | | | | |
| エ | い | つ | ど | ん | な | 異 | 常 | が | 現 | れ | る | か | 、 | 期 | 待 | と | 緊 | 張 | で | ど | き | ど | き | し | て | い | る | 。 | | | | | | | | | | | | | | |

問十二 空欄 **Ⅱ** に入るもつとも適当なものを次のア、イ、ウから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | 今 | で | も | 心 | 底 | 落 | 胆 | し | て | い | る | 。 | し | か | し | 落 | 胆 | ば | か | り | で | は | 研 | 究 | は | 進 | ま | な | い | の | で |
| イ | 今 | で | も | う | 落 | 胆 | し | て | い | な | い | 。 | 想 | 像 | を | た | く | ま | し | く | す | れ | ば | | | | | | | | |
| ウ | 今 | で | も | 半 | ば | 落 | 胆 | し | て | い | る | 。 | し | か | し | も | う | 半 | 分 | の | 気 | 持 | ち | で | は | | | | | | |
| エ | 今 | で | は | ま | っ | た | く | 落 | 胆 | し | て | い | な | い | 。 | な | ぜ | な | ら | ば | | | | | | | | | | | |

問十三 空欄

Ⅲ

に入るもつとも適當なものを次のア～エから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

ア 次の瞬間には イ 私たちが死ねばすぐさま ウ 次の世代には エ そのままの形で

問十四 「生命とは何か」について著者がもつとも重視する論旨として適當なものを次のア～エから一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- ア 生命は実験的に異常を生じさせても、それを修正するシステムである。
- イ 生命は個々のパーツに還元できない動的なシステムである。
- ウ 生命は自己複製を行うシステムである。
- エ 生命は無生物には見られない特別な要素を有する動的平衡システムである。

(三) 次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

今は昔、陽成院のおはしましける所は、二条よりは北、西の洞院うちんよりは西、大炊の御門おほひよりは南、油の小路よりは東、二町になむ住ませたまひけるに、院のおはしまさで後には、その冷泉院の小路をばあけて、北の町は人の家どもになりて、南の町にぞ池などすこし残りてありける。

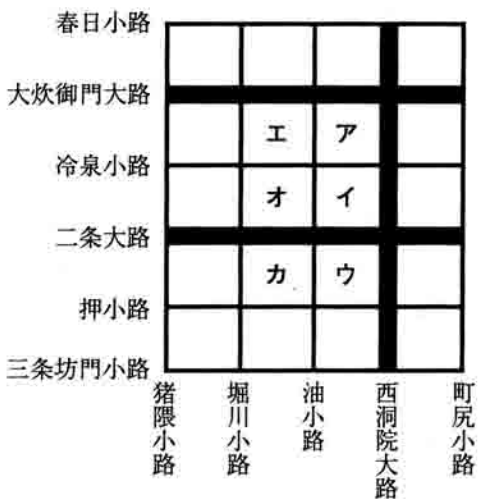
それにも人の住みける時に、夏ごろ西の台の縁に人の寝たりけるを、丈三尺ばかりある翁の来て、寝たる人の顔をさぐりければ、あやしと思ひけれども、おそろしくていかにもえせずして、空寝をしてふしたりければ、翁やはら立ち帰りて行くを、星月夜に見やりければ、池のみぎはに行きてかき消つやうに失せにけり。池はらふ世もなければ、浮草・菖蒲生ひ繁りて、いとむつかしげにておそろしげなり。

されば、いよいよ「池に **a**」とおそろしく思ひけるに、その後よなよな来つづさぐりければ、これを聞く人みなおぢあひたるほどに、つはものだちたる者ありて、「いで、おのれその **b**、かならず捕らへむ」といひて、その縁にただひとり芋繩かきを具してふして、よもすがら待ちけるに、宵のほど見えざりけり。夜中は過ぎやしぬらむと思ふほどに、待ちかねて少しまどろみたりけるに、面にもものひややかにあたりければ、心にかけて待つことなれば、寝心にもきとおぼえて、おどろくままに起き上がりて捕らへつ。芋繩をもてただ縛りに縛りて、高欄に結びつけつ。

さて、人に告ぐれば、人集まりて火をともして見ければ、丈三尺ばかりなる小翁の浅黄の上下着たるがたゆげなる、縛りつけられて目をうちたたきてあり。人もの間へどもいらへもせず。しばしばかりありて、少しゑみてここかしこ見めぐらして、細くわびしげなる声にていはく、「盥かんに水を入れて得むや」と。されば、大きな盥に水を入れて前に置きたれば、翁首をのべて盥にむかひて水影を見て、「我は水の精ぞ」といひて、水につぶりと落ち入りぬれば、翁は見えずなりぬ。されば、盥に水多くなりて、はたよりこぼる。縛りたる **c** は、結はれながら水にあり。翁は水になりてとけにければ失せぬ。人みなこれを見て、おどろきあやしびけり。その盥の水をば、こぼさずしてかきて池に入れてけり。

それより後、翁来て人をさぐるることなかりけり。

問十五 傍線部「池」の所在地を、左の地図の中に求めるとするならば、どこにあたるか。地図中のア、カから選び、その記号の記入欄にマークせよ。



問十六 傍線部2、6の中で、一つだけ主語が異なるものはどれか。次のア、オから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- ア 傍線部2 イ 傍線部3 ウ 傍線部4 工 傍線部5 オ 傍線部6

問十七 空欄 a には、次のア、カを並べ替えた文言が入る（ただしア、カには、活用語については終止形を掲げている）。正しく並べ替えたときに、はじめから三番目に来る語はどれか。その記号の記入欄にマークせよ。

- ア あり イ 住む ウ なり 工 む オ 者 カ や

問十八 空欄 b に入るもつとも適当な語句を次のア、オから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- ア あやしと思ひける者 イ 池はらはざる者 ウ 縁に寝たる者 工 おづべからざる者
オ 顔さぐるらむ者

問十九 傍線部7の解釈として、もつとも適当なものを次のア、オから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- ア 氣に病んで待つていたところ、床に就いていてもとかく不安になって
イ 心の中で念じつつ待つていると、夢うつつの中でも来たことが知られて
ウ 心用意をして待つていたことなので、うとうととしていてもはつと気がついて
工 準備万端整えて待ちかまえていたので、眠たいと思う気持ちもすっかり失せて
オ 心配しながら待つていたならば、きつと眠つていても感づくだらうと

問二十 傍線部8、11の格助詞「の」の中で、一つだけ意味が異なるものはどれか。次のア、工から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- ア 傍線部8 イ 傍線部9 ウ 傍線部10 工 傍線部11

問二十一 空欄 c に入るもつとも適当な語句を次のア、オから選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- ア 翁 イ 上下 ウ つはもの 工 繩 オ 水の精